



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	英文法教育と生成文法：疑問詞・関係詞を含む複文をめぐって
Author(s)	吉本, 靖
Citation	琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies(61): 1-20
Issue Date	2017-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/36687">http://hdl.handle.net/20.500.12000/36687</a>
Rights	

## 英文法教育と生成文法：疑問詞・関係詞を含む複文をめぐって

吉本 靖

### 1. はじめに

生成文法のように抽象度の非常に高い言語理論は、英語教育に応用することは難しい。生成文法を学ぶことにより英語の文の仕組みがよくわかり、英語力の向上につながると期待する学生に筆者は何度も遭遇してきたが、そのような学生たちには、残念ながらそれは期待外れに終わってしまうということを告げるのが常である。生成文法研究は人間の持つ言語能力を解明することを目的として行われるため、どのようにして実践的な英語運用能力を身につけるかという多くの英語学習者が持つ関心とは研究の方向性が異なるのである。

しかしながら英文法教育に生成文法研究の成果が全く役に立たないというわけでもない。数は少ないが、伝統的な英文法による説明よりも生成文法的説明の方が有効であると思われる文法項目も存在する。本稿では、外国語として英語を教える際に有効であると思われるそのような生成文法的説明について詳述し、その有効性を検証していきたい。なお、本稿で「生成文法」と呼んでいる文法理論は、その創始者である Noam Chomsky を中心とするいわゆる「主流派」の理論を指している<sup>1</sup>。日本における伝統的な英文法の解説書としては、江川（1964, 1991）、綿貫ほか（2000）、石黒（2013）を参照し、それらにおける解説と生成文法的説明を比較対照していく。

### 2. 複文 wh 疑問文の伝統的英文法による説明

この節では疑問詞を含む複文の疑問文について考察する。疑問詞を含む疑問

文は伝統的英文法では「特殊疑問文」と呼ばれることもあるが、生成文法で使われる「wh 疑問文」の方が指示対象がわかりやすいと思われるので、本稿では後者の用語を使用することにする<sup>2</sup>。まず例文 (1) を見てみよう。

(1) **What do you think will happen?** (何が起こると思いますか)

主節の動詞 **think** の直後に助動詞 **will** が来ているため、この文がなぜ文法的なのか疑問を持つ学生が少なからずいるようである。これと似たような文として (2) がある。

(2) **Who do you think she will call?** (彼女は誰に電話すると思いますか)

例文 (1) と (2) に共通しているのは、文頭の疑問詞が意味上は埋めこみ文（従属節）の動詞の項であるという点である。文法機能の観点から言うと (1) では疑問詞 **what** は埋めこみ文の動詞 **happen** の主語であり、(2) では疑問詞 **who** は埋めこみ文の動詞 **call** の目的語である。

以下、上記 (1)、(2) のような文が伝統的な英文法の参考書でどのように説明されているかを見ていく。

### 2.1. 江川 (1964, 1991)

江川 (1964: 63) の §42 には「語順に注意して比較せよ」という指示のもと、次の例文が提示されている。(太字、斜体は原文のまま。) この中に上記 (2) の例文のパターンに属する (3c) が見られる。

- (3) a. **Who is he?** (あの人は誰ですか)
- b. **Do you know *who* he is?** (あの人は誰だか知っていますか)
- c. ***Who do you think* he is?** (あの人は誰だと思いますか)

これらの文を比較して何がわかるのかについて明示的な説明はされていないが、

確認できることは次のことである。

- (4) a. 単文の **wh** 疑問文においては疑問詞が文頭に現れ、主語と **be** 動詞の倒置が起こる。
- b. 文全体が **yes-no** 疑問文で埋めこみ文が間接疑問の場合、疑問詞は埋めこみ文の文頭にあり、埋めこみ文においては主語と **be** 動詞の倒置は起こらない。
- c. 複文で文全体が **wh** 疑問文の場合、疑問詞は主文の文頭にあり、埋めこみ文の語順は平叙文と同じで、主語と **be** 動詞の倒置は起こらない。

例文 (3a-c) を比較させることにより、(3c) における埋めこみ文の語順は (3b) の埋めこみ文における間接疑問の語順と同じであることを読者に巧みに理解させていることがわかる。しかしながら、(4a-c) にあげた観察を (3a-c) の例文を比較するだけで導き出せる人は既に相当程度の英文法の知識が備わっている人であろう。Chomsky は伝統的な文法は本質的に読者の直感や知性に頼っていると折に触れて述べているが<sup>3</sup>、上の例などはその好例だと思われる。

さて、(3c) は最初にあげた (2) と同じ構文であるが、(1) に類似した例文を探してみると、「It seems, do you think などの挿入」と題された § 292 (p. 451) に次の例文が見つる。

- (5) I saw faith shine in the eyes of those who trusted in what I could only think was an illusion. (私には幻想としか見えぬものを信じている人々の目に、信仰の光が輝くのを見た)

残念ながら (5) は完全に (1) と同じ構文には属さない。なぜなら (1) は **wh** 疑問文であるが (5) は平叙文であり、(1) 同様 (5) にも **what** が現れているが、(1) の **what** が疑問詞であるのに対して (5) の **what** は関係代名詞であるという違いがあるためだ。にもかかわらず (5) をここで引用したのは **what** の後に動詞 **think** を含む節があり、**think** の直後に述部が来ている点が (1) と同じだから

らである。後で詳述するように生成文法では (1) と (5) に見られる **what** には全く同じ移動操作が関与していると分析する。

ここで注目したいのは (5) が「挿入」の関与した例文であるとされている点である。すなわち (5) における斜体の部分 *I could only think* は挿入節であると分析されている。この分析は (5) においては自然である。なぜなら斜体部分を取り除いた次の文も文法的であるからだ。(下線は「挿入節」のあった場所を示す。)

(6) **I saw faith shine in the eyes of those who trusted in what \_\_ was an illusion.**

(幻想を信じている人々の目に、信仰の光が輝くのを見た)

しかし (5) と同じページ (p. 451) に掲載されている (7) の文については、「挿入」が関与しているという説明は適切でないであろう。

(7) **Where do you think he went?** (どこへ行ったと思いますか)

なぜなら、(7) から *do you think* を取り除くと (8) の非文ができてしまうからだ。

(8) **\*Where \_\_ he went?**

江川 (1964) の説明の中には「挿入節がある場合、それを除いても文が成り立たなければならない」という条件があるわけではないが、(5)、(7) 以外の § 292 に提示されている例文においては、挿入節を取り除いてもそのまま文が成立する<sup>4</sup>。したがって (8) の非文法性については何らかの説明が必要である。

このことと関連して最初の例文 (1) と (2) に戻って、これらの文に存在する **do you think** を取り除いた文を見てみよう。

(1') **What \_\_ will happen?**

(2') \*Who \_\_ she will call?

ここでも文法性に違いが見られ、なぜこのような違いがあるのかという疑問が生じる。

これまでの観察をまとめると、(1)、(2)、(5)、(7)に現れる *think* を含む節が挿入節であるならば、そしてここでいう「挿入」という操作がどのような構文においても同じ効果をもたらす操作であるのならば、(1') と (2') の間に見られる文法性の相違や (6) と (8) の間に見られる文法性の相違に対しては何らかの説明が必要である。そのような説明は残念ながら江川 (1964) には見当たらない。「残念ながら」と書いたのは、筆者自身この定評ある参考書には大変お世話になったし、この本の全体的な価値については疑いの余地がないからである。

さすがにと言うべきか、江川 (1964) の改定三版である江川 (1991) では、上記 (1)、(2)、(5)、(7) のような *do you think* などを含む文は「挿入」の例からは除外されている<sup>5</sup>。そしてその代りに明らかに挿入であると分析できる次のような例が掲載されている。

(9) *Most fish, I always think, taste better when they are grilled than when fried.*

(私はいつも思うのだが、たいていの魚はフライにするよりも焼いたほうがおいしい)

この変更により、(1) や (2) が *do you think* の挿入により形成されるとする説は姿を消したのであるが、ではそもそも (1) や (2) のような文はどのようにして形成されるのであろうか。これに関しては改定三版の江川 (1991) に答えは見出せない。唯一のヒントは § 53 (p. 73) にある次の 2 文であるが、「[a] と [b] の語順の相違に注意したい」との記述があるのみである。

(10) a. *Do you know who he is?* (あの人はだれだか知っていますか)

—*Yes, I do. / No, I don't.* (知っています / 知りません)

b. **Who do you think he is?** (あの人はだれだと思いますか)

—I think he is Mr. Brown. (ブラウンさんだと思います)

聡明な読者であれば (10b) の埋めこみ文の語順は (10a) の間接疑問の語順と同じであることに気づくであろう。だが、(10b) に準ずる文で疑問詞が主語の働きをしている文については例がないため、そのような文については (10) の例文にならって自ら考えるしかない。例えば、(11) のようなペアが考えられるだろう。

(11) a. **Do you know who wrote this book?**

(だれがこの本を書いたか知っていますか)

b. **Who do you think wrote this book?**

(だれがこの本を書いたと思いますか)

例文 (10a-b) にならって、(11a) の疑問詞以下の部分はそのままして、疑問詞を **do you think** の前に置けば (11b) ができる。実際 (11b) は正文であるが、(10) の例文をヒントにここまで考えられる人は少ないのではないか。また、ここまで考えられた人でも実際に (11b) が正しいかどうかは実例が示されていない限り確信を持ってないであろう。この点、江川 (1991) よりも後に出版された石黒 (2013) は親切で、(11b) のような文の実例を示し、その語順についても正確な記述がある。次の節でその記述を詳しく見ていくことにしよう。

## 2.2. 石黒 (2013)

石黒 (2013: 367) には次の例文が提示されている。

(12) a. **What do you think that light is?** (あの光は何だと思いますか)

I think it's a fishing boat. (釣り船だと思うわ)

b. **Do you know what that light is?** (あの光が何か知っていますか)

No, I don't. (いいえ、知りません)

本稿における議論と関係するのは次の記述である。

- (13) [(12)]のような「何[だれ]だと思いますか?」という意味の文では、疑問詞を文頭に出して〈疑問詞+do you think ... ?〉という形にする。また、think に続く部分は、平叙文の語順になることにも注意が必要。think 以外にも、believe 〈信じる〉や suppose 〈想像する〉などの動詞を用いる場合は、同様の語順にする。

さらに、「主語が疑問詞になっているパターンに注意」という見出しのもと、次の記述も見られる。

- (14) what や who、which が、do you think [believe / suppose]に続く節の主語として働いている文では、do you think [believe / suppose]の後に（助）動詞が続く。

そして例文として下記の文があげられている。

- (15) a. **Who do you think is the best player on our team?**  
(チームで一番いい選手はだれだと思いますか)
- b. **What do you think will be the most successful movie this year?**  
(今年もっとも成功する映画は何だと思いますか)
- c. **Which do you suppose is the better plan?**  
(どちらのほうがよい計画だと思いますか)

かくして、江川（1964, 1991）ではヒントしか与えられていなかった（15）のような文の仕組みについて、石黒（2013）では明示的な説明が与えられており、少なくともこの点に関しては江川（1964, 1991）よりも進歩していることが見て取れる。



しかしながら、石黒（2013）における記述においても、疑問詞が主語の働きをしている（15a-c）と疑問詞が補語の働きをしている（12a）はその説明において区別されており、なぜ疑問詞が主語の時には *think* などの動詞の後に（助）動詞が続くのかについては説明がない<sup>6</sup>。このような時に明示的な説明を与えるのが生成文法の強みである。そのことを例証する前に、後一つの伝統的な英文法参考書で（12a）のような文がどのように説明されているか見ておこう。

### 2.3. 綿貫ほか（2000）

綿貫ほか（2000）においては、「注意すべき間接疑問の語順」と題された § 113 (p. 252-253) で（16）の例を示し、（17）のように説明している。

(16) **What do you think I have in my hand?** (手に何を持っていると思う?)

**I think you have some cherries.** (サクランボだと思う)

(17) 「・・・をどう思いますか」などの意味のこの型の疑問文は、**Yes, No** では答えられない。全体として特殊疑問文 [= *wh* 疑問文] になるので、疑問詞が文頭にきて、**do you think** は挿入的になる。この型の主節の動詞は、**think** や **believe** など判断に関するものが多い。

ここでも江川（1964）同様、「**do you think** は挿入的になる」と説明していることに注目したい。そうすると、江川（1964）の挿入分析に対して提示した問題、すなわち「挿入節」を取り除いた時に非文になる例があるという問題がここでも生じる。綿貫ほか（2000）では「**What do you think ... ?** 型を取る動詞」として **think** 以外に 15 個の動詞をあげていて、この点では本稿で参照している三つの参考書の中で最も情報量が豊富である。しかしながら、（16）、（17）の提示されている § 113 には疑問詞が主語の働きをしている例文は皆無で、（15）にあるような文に関する文法的説明が欲しい読者にとっては残念であろう。

以上、(1) - (2) のような複文の *wh* 疑問文について、伝統的英文法の参考書がどのように解説しているかを見てきた。次節では、これらの文が生成文法的

手法を使うとどのように説明されるのかについて考察していく。

### 3. 複文 wh 疑問文の生成文法的説明

本稿の目的は生成文法理論の解説ではなく、実践的な英語運用能力を高めることを目的としている学生たちが (1)、(2) のような文の文法的説明を知りたいという時に生成文法の分析を役立てることである。従って、複雑な生成文法の議論は抜きにして、伝統英文法で簡単にわかる部分はすでにわかっていることとして論を進めていく。実はこの「簡単にわかる部分」というものが曲者で、生成文法的にきちんと説明しようとするとき非常に厄介であったりするのだが、英文法教育においてはそこは割り切って伝統英文法に頼った方が良いことは確かである。

では、最初に疑問詞が埋めこみ文の目的語として働いている wh 疑問文 (18) について考えてみよう。

(18) **What do you think John ate?** (ジョンは何を食べたと思いますか)

この文の仕組みを生成文法的に説明するためには、まず (19a-d) の例文を提示し、(20a-d) の説明を加える方法がある。

(19) 埋めこみ文の目的語について尋ねる wh 疑問文の作り方

- a. I think John ate the apple. (基礎となる平叙文)
- b. Do you think John ate the apple? (yes-no 疑問文)
- c. Do you think John ate what? (what を ate の目的語の位置に置く)
- d. **What do you think John ate \_\_\_ ?** (wh 移動)



(20) a. (18) の基になるのは (19a) にある平叙文である。

- b. (19a) に対応する **yes-no** 疑問文は (19b) である。
- c. (19b) の **ate** の目的語が何であるか分からない時にはその目的語の位置に **what** を置く<sup>7</sup>。そうやってできたのが (19c) である。
- d. 英語の通常の疑問文においては (19c) の段階では文が完成せず、疑問詞は文頭に移動させねばならないという決まりがある<sup>8</sup>。そこで (19c) の疑問詞 **what** は文頭に移動し (19d) ができる。

(20) の説明では生成文法用語は極力使用せずに (18) の文の作り方が述べられている<sup>9</sup>。(19a) から (19b) を作り出すためには時制辞の主要部移動及び **do-support** と呼ばれる操作が必要なのだが、その説明をすると学習者を混乱させるだけなので、それには触れない<sup>10</sup>。(19a) に対応する **yes-no** 疑問文は (19b) であることは中学校で習うことなので、その事実を確認するだけで十分である。

(19) と (20) の説明で重要な点は、疑問詞 **what** が最初は埋めこみ文の動詞の目的語の位置にあり、そこから文頭に移動しているという点である。

次に、疑問詞が埋めこみ文の主語の働きをしている **wh** 疑問文 (21) の作り方について見てみよう。この文は (22) に示した過程を経て作られる。

(21) **Who do you think ate the apple?** (誰がそのリンゴを食べたと思いますか)

(22) 埋めこみ文の主語について尋ねる **wh** 疑問文の作り方

- a. I think John ate the apple. (基礎となる平叙文)
- b. Do you think John ate the apple? (yes-no 疑問文)
- c. Do you think **who** ate the apple? (who を ate の主語の位置に置く)
- d. **Who** do you think \_\_\_ ate the apple? (wh 移動)



(22a-b) までは (19a-b) と同じであり、違いは (22c) の段階で起こる。リンゴを食べた人を知りたいのであるから、埋めこみ文の主語の位置に疑問詞 **who**

を置く。あとは(19d)と同様に疑問詞を文頭に移動し、(22d)の文が完成する。

(21)では動詞 **think** と **ate** が連続しているため、初めてこのパターンの文を見た学習者は奇異に思うかもしれない。だが、(22)のメカニズムでこの文ができることを理解すれば、なぜ動詞が連続して現れるのかについて納得することであろう。

伝統文法的説明との対比で注目したいことは、上記(19)、(22)に例示されている生成文法的分析においては、**do you think** の部分は主節の主語と動詞を含む部分であり、なくても構わない挿入要素ではないということである。したがって、挿入分析で問題として指摘された(23)のような文法性の違いは生成文法的分析においては問題とにならない。主節の主語と動詞は文の要の構成素であり、それらを省略することはできないからである。

- (23) a. \***What** \_\_ **John ate**? (例文(18)から **do you think** を除いた文)  
b. **Who** \_\_ **ate the apple**? (例文(21)から **do you think** を除いた文)

また、(18)、(21)は主節の動詞に **think** が使われている例であるが、他の動詞が使われている文も(19)、(22)の方法と同様に作られる。例として主節の動詞が **say** である(24)と(25)を見てみよう。


- (24) **What did Ken say John ate**? (疑問詞は **ate** の目的語)  
(Ken は John が何を食べたと言いましたか)  
(25) **Who did Ken say ate the apple**? (疑問詞は **ate** の主語)  
(Ken は誰がそのリンゴを食べたと言いましたか)

(24)、(25)ともに基本になる平叙文は(26a)であり、それを **yes-no** 疑問文にしたのが(26b)である。

- (26) a. **Ken said John ate the apple.** (平叙文)  
b. **Did Ken say John ate the apple**? (**yes-no** 疑問文)


Ken が何を食べたのか知らなければ、(26b) の the apple の位置に what を置き、それを文頭に移動して (27) (= (24)) ができる。

(27) **What did Ken say John ate** \_\_ ?      (wh 移動)



一方、誰がリンゴを食べたのか知らなければ、(26b) の John の位置に who を置き、それを文頭に移動して (28) (= (25)) ができる。

(28) **Who did Ken say** \_\_ ate the apple ?      (wh 移動)



以上、生成文法の手法を用いて、埋めこみ文の主語や目的語について尋ねる wh 疑問文の仕組みを教える方法について述べてきた。その際、「wh 移動」と呼ばれる操作が重要な役割を果たしているのだが、この操作は疑問文だけに見られるものではない。関係代名詞や関係副詞などを含む関係詞節の形成にも関わっている操作である。次節では、複文の関係節の文法的説明にも生成文法的手法が有効であることを示すこととする。

#### 4. 関係詞節における wh 移動

2.1 節では江川 (1964) に見られる次の例文にも言及した。(例文 (5) を再掲。)

(29) I saw faith shine in the eyes of those who trusted in what I could only think was an illusion. (私には幻想としか見えぬものを信じている人々の目に、信仰の光が輝くのを見た)

この文には先行詞を兼ねた関係詞の what があるが、それを含む関係詞節の形成の仕方も基本的には前節で述べた wh 疑問文と同じである。そのメカニズム

を (30) に示す。

- (30) a. I could only think something was an illusion. (基礎となる平叙文)  
b. I could only think **what** was an illusion. (what を主語の位置に置く)  
c. **what** I could only think \_\_ was an illusion. (wh 移動)



前節の wh 疑問文と異なり、関係詞節は疑問文ではないので yes-no 疑問文を作る段階は当然ながら省かれている。(30) に示された過程を経て (29) の関係詞節が形成されることを理解すれば、I could only think の部分は挿入節ではないことも明確になるだろう。

先行詞の後にくる関係詞節も見ておこう。(31) - (32) の例は Corpus of Contemporary American English (COCA) から見つけたもので、[ ] で括った部分が関係詞節である。


- (31) someone [who I suspect in many cases you share views with], ...  
(多くの場合にあなたと同様の意見を持っていると思われる人)  
(32) a Democratic governor [who I suppose would be considered a liberal], ...  
(自由主義者と見なされると思われる民主党の州知事)

例 (31) は関係代名詞 who が埋めこみ文の前置詞 with の目的語の働きをしているもので、(33) に示す過程を経て作られると説明できる。

- (33) a. I suspect in many cases you share views with someone  
(基礎となる文)  
b. I suspect in many cases you share views with **who**  
(who を with の後に置く)  
c. **who** I suspect in many cases you share views with \_\_ (wh 移動)



例 (32) は関係代名詞 **who** が埋めこみ文の述部 **would be considered** の主語の働きをしているものである。この場合は (34) に示すように関係代名詞 **who** は **would** の直前にまず置かれ、**wh** 移動により文頭にくる。

- (34) a. **I suppose someone would be considered a liberal**  
(基礎となる文)
- b. **I suppose who would be considered a liberal**  
(**who** を **would** の前に置く)
- c. **who I suppose \_ would be considered a liberal** (wh 移動)  


「なぜ **wh** 移動が起こるのか」という質問が出れば、関係詞節の場合には、関係詞が先行詞の隣に行くことによりその先行詞が、後続する関係詞節によって修飾されることが示され、かつその先行詞は関係詞節の中の空所（通常なら何らかの語句があるべきだが空いている場所：(34c) では **would** の直前）にあるがごとく解釈されるということを示すため、と答えればよいであろう。「では、**wh** 疑問文の場合にはなぜ **wh** 移動が起こるのか」という問いに対しては、疑問詞を文頭に置くことにより、その疑問詞の求める情報を得ようとしている疑問文であるということを示すため、と答えることが可能であろう。

次に、伝統的英文法参考書では (31) - (32) のような関係詞節がどのように説明されているのかを簡単に確認しておきたい。まず江川 (1964, 1991) にはこのような複文の関係詞節に関する説明は見当たらない。綿貫ほか (2000) では § 308 (p. 651) で「関係代名詞の後に **I hear, I think** が挿入されることがある」という記述がある。第 2.3 節で見た彼らの **wh** 疑問文の説明同様、ここでも **I think** などの表現は挿入されたものと捉えられている。ここで注目したいのは **wh** 疑問文の場合に確認された挿入分析の問題点は、関係詞節の場合は生じないということである。例えば綿貫ほか (2000: 651) に見られる次の例文を考えてみよう。

(35) a. I saw a woman **who** *I thought* was a friend of my mother's.<sup>11</sup>

(私はたしか母の友人と思われる婦人を見かけた)

b. That is a statement **which** *I believe* I can prove.

(それは私が必ず立証できると思う陳述だ)

例文 (35a) の関係代名詞 **who** は埋めこみ文の動詞 **was** の主語の働きをしている。一方、例文 (35b) の関係代名詞 **which** は埋めこみ文の動詞 **prove** の目的語の働きをしている。第 2 節で見た複文の **wh** 疑問文の場合は、疑問詞が目的語の働きをしている場合、「挿入節」を取り除くと非文が生じた。(2.1 節の (2') を参照。) ところが、(35) の関係詞節の場合、(36) に示したように斜体字の部分を除いても文法性に変化はない。

(36) a. I saw a woman **who** .... was a friend of my mother's.

b. That is a statement **which** .... I can prove.

したがって関係詞節に関する限りは「挿入」という概念を使った説明もある程度の説得力を持つといえよう。しかしながら、関係詞節と同時に **wh** 疑問文も同じように説明できるという点で、やはり **wh** 移動を用いた生成文法的説明の方が優れているといえるだろう。

石黒 (2013: 316) では、(37) の例を提示し、(38) のような説明を与えている。

(37) The woman **who** *I thought* was her sister was actually her mother.

(私が彼女の姉だと思ったその女性は、実は彼女の母親だった)

(38) 関係代名詞の後にほかの節 (SV) が続いて、〈関係代名詞+**SV**+V...〉という形になる場合がある。この場合は、関係代名詞の直後の **SV** をカッコに入れて考える。例文ではいったん *I thought* をはずして、**the woman**



**who was her sister** とする。これに **I thought** の意味を加えて、「彼女の姉だと思った女性」とすればよい。

この説明は明らかに「挿入」説に通じるものがある。しかし、説明が詳しく丁寧なので読者にとっては分かりやすいだろう。画期的なのは、「参考」として(39)の説明が加えられていることだ。

- (39) この形の文は、**I thought she was her sister** の **she** が関係代名詞の **who** となり、節の頭に移動したと考えられる。

**the woman who I thought (she) was her sister**



一読して分かるように(39)の説明はまさに生成文法的である。英文法の参考書にも少しずつ生成文法の成果が取り入れられてきているということであろう。

## 5. 終わりに

本稿では、生成文法的な説明を英文法教育に応用できる構文として、複文の **wh** 疑問文及び複文の関係詞節を取り上げた。どちらも生成文法で **wh** 移動と呼ばれる操作が適用される構文である。伝統的な英文法ではこれらの構文に見られる **I think** などの節は「挿入的」と説明されていたり、「カッコに入れて考える」と説明されていたりする。これらの説明は複文の関係詞節に対しては有効であるが、複文の **wh** 疑問文に対しては「挿入節」を取り除いた時にできる文や句が文法的である場合とそうでない場合があるという問題があったり、両構文を統一的に説明できないという難点がある。一方、生成文法的説明を採用すれば、両構文を **wh** 移動という操作を用いて統一的に説明することができる。

生成文法理論は高度に抽象的な理論であるため、英語教育に応用できることは非常に限られている。しかしながら、本稿で取り上げたような構文の文法的

説明に関しては、専門用語をほとんど使用せずとも直感的に理解できるような生成文法的説明が可能であることを示せたのではないかと思う。近年、言語理論を英語教育に応用することを目的とした研究書や、現代言語学の成果をもとに伝統的英文法を見直した斬新な英文法の本などが出版されている<sup>12</sup>。このような研究が発展していけば、言語理論と言語教育の接点が少しずつ拡大していくことが期待される。

## 註

<sup>1</sup> 主流派の生成文法理論では移動操作が認められているが、移動操作を認めない生成文法理論としては、Kaplan and Bresnan (1982) や Bresnan (2001) に代表される Lexical Functional Grammar (LFG) や Pollard and Sag (1994) に代表される Head-Driven Phrase Structure Grammar (HPSG) などがある。

<sup>2</sup> 英語の疑問詞のほとんどが wh で始まる語なのでこの名称がついている。例外は how である。

<sup>3</sup> 例えば Chomsky (1964: 16-17) や Chomsky (1977: 109) を参照。

<sup>4</sup> 江川 (1964: 450) § 292 の A にある例文を参照。

<sup>5</sup> 江川 (1991: 498) § 327 参照。

<sup>6</sup> 聡明な読者なら、与えられた記述からより深いメカニズムを導き出せるであろうが、その作業は読者に委ねられている。ここでも注 3 の文献に見られるような Chomsky の指摘は適切であると言えよう。

<sup>7</sup> 現行の生成文法理論では、疑問詞 what は基底構造 ((19a) に相当する構造) ですでに ate の目的語の位置にあると考えられているが、英文法教育に応用する時には、実際に存在する文を基礎にした方が理解しやすいと思われる。(19a) で疑問詞のない平叙文を提示しているのはそのためである。以下、同様の分析を本稿では示すこととする。

<sup>8</sup> 次の (i) のようないわゆる echo question (問い返し疑問文) では疑問詞は元位置に止まる。

(i) **John ate what?** (ジョンは何を食べたって?)

<sup>9</sup> ここで使用している「文の作り方」という表現は生成文法用語では「文の派生(の仕方)」と言うべきだが、後者は誤解を招きやすいため前者を使用している。

<sup>10</sup> 迂言的助動詞 do の出現理由については Chomsky (1957: §7) 参照。この助動詞の分布に関するミニマリスト・プログラムの枠組みにおける試論が Yoshimoto (2000) に提示されている。

<sup>11</sup> この例文の who は省略できるため、綿貫ほか(2000)では who が括弧の中に入れられている。本稿では説明の便宜上、括弧は除いている。

<sup>12</sup> 前者に関しては藤田ほか(2012)、後者に関しては Huddleston and Pullum (2002, 2005) を参照。

## 参考文献

Chomsky, Noam (1957) *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.

Chomsky, Noam (1964) *Current issues in linguistic theory*. The Hague: Mouton.

Chomsky, Noam (1977) *Language and responsibility*. New York: Pantheon Books.

Bresnan, Joan (2001) *Lexical-functional syntax*. Oxford: Blackwell.

江川泰一郎 (1964) 『英文法解説 —改定新版—』東京：金子書房。

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 —改定3版—』東京：金子書房。

藤田耕司・松本マサミ・児玉一宏・谷口一美 (編) (2012) 『最新言語理論を英語教育に活用する』東京：開拓社。

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2005) *A student's introduction to English grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.

石黒昭博 (監修) (2013) 『総合英語 Forest (フォレスト) 第7版』東京：桐原書店。

Kaplan, Ronald and Joan Bresnan (1982) *Lexical-functional grammar: A formal system*

for grammatical representation. In: Joan Bresnan (ed.) *The mental representation of grammatical relations*, 173-281. Cambridge, MA: MIT Press.

Pollard, Carl and Ivan A. Sag (1994) *Head-driven phrase structure grammar*. Chicago: The University of Chicago Press.

綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘・マーク＝ピーターセン (2000) 『ロイヤル英文法 改定新版』東京：旺文社.

Yoshimoto, Yasushi (2000) On the distribution of the periphrastic auxiliary *do* in English: A minimalist account. *Ryudai review of Euro-American studies* 44: 115-137.

## Abstract

### **English Grammar Education and Generative Grammar: How to Teach Complex-Sentence *wh*-Questions and Complex-Sentence Relative Clauses**

Yasushi YOSHIMOTO

Generative grammar is highly abstract, and it is not designed with its application to language teaching in mind. It is no surprise, then, that generative grammatical analyses of English are mostly of no use in teaching English grammar to learners of English. Nevertheless, there are a few constructions that seem to be better taught using the analysis of generative grammar. This paper shows that complex-sentence *wh*-questions and complex-sentence relative clauses are such constructions. We will first examine how traditional English grammar books in Japan describe these constructions. Pointing out some difficulties with these descriptions, I will show how these constructions can be taught using the insights of generative grammar. This can be done with very few technical terms, although the operation of “*wh*-movement” needs to be introduced. By showing how *wh*-movement takes place, we can expect learners to understand that complex-sentence *wh*-questions and complex-sentence relative clauses can be formed by the same mechanism, and why they have the word order that they have.